

堀江湛先生の思い出

堀江湛先生が二〇二〇年一月二二日に永眠された。八九歳の大往生であられたと思う。塾を退職された以降も尚美学園大学の学長を務められるなど、ご活躍された。堀江先生を初めてお見かけしたのは、一九七七年四月に塾の政治学科に入学して、日吉キャンパスで開講されていた必修の「政治学」の授業においてである。その授業を担当されていたのがたまたま堀江先生であった。たまたまというのは、当時は必修の政治学は堀江先生と内山秀夫先生が異なる時間に担当されていたが、学生の方が自由に選択できるのではなく、クラス指定であったからだ。教壇の椅子に座られたまま、ほとんどメモなども見られず、分かりやすく講義をされていたのが印象的であった。現実の日本政治を踏まえながら、政治という現象をどのように分析するかについてもっぱら講義されていたように記憶している。内山先生のクラスに配当されていたならば、その後の私の人生は大きく変わったもの

になっていただろう。

その当時私にとって堀江先生は単に「政治学」という授業の担当者で、常任理事をされている先生という認識しかなかったことは確かである。堀江先生の薫陶を受けて研究者を目指した訳ではない。そもそもは外交官や公務員になることを夢見ていた。学部時代の指導教授は経済学を専門とされていた田中宏先生であった。もともとは経済学部を第一志望としていた私にとっては自然な選択であった。大学院に進学して研究者の道を歩もうなどということ是最初から考えていたわけではない。しかし、田中先生の指導の下、合理的選択という演繹的な思考方法を学んだことは確かである。そんな私が現在母校で政治学を教えているのには、多くの偶然と幸運な出会いがあったからである。その最大のが堀江先生との出会いである。

私が大学院進学を考えたのは先輩からの一言があったからである。大学院進学のために特別な勉強もしたわけではない。地方公務員の試験に合格した余裕で大学院の試験にもかるうじて合格したといっても過言ではない。大学院に合格した後、大学院ではそのまま田中先生に指導していただけたものと思っていた。しかし卒業前のあ

る日、田中先生に連れられて、塾監局の理事室に出向き、堀江先生に挨拶に行くことになった。田中先生は当時まだ助教で博士課程の学生を指導する資格がないということ、その資格を持つ堀江先生を大学院の指導教授として紹介していただいたのである。その時がまさに堀江先生との最初の会話であった。堀江先生がその際に言われたある一言が今でも強烈に記憶に残っている。それは「あそこに行きたい、ここに行きたいと言われると困るが、どこでもよいというのなら、将来の就職先には困ることはない。」というものである。当時は一八歳人口が年々増加していた時代であり、全国各地で大学の新設や学部が増設が盛んに行われていた。堀江先生のところにはそのような大学の関係者から様々な相談があったよう、そのどれかに押し込むことができる力を持たれていたのだらう。実際私は修十二年の時に堀江先生から履歴書を書くように言われた。一九八六年四月に開校予定の杏林大学社会科学部専任の助手のポストであった。慶應の法学研究科博士課程の学生という身分と杏林大学の専任教員という身分を同時に持つという非常に幸運な研究者としてのスタートであった。堀江先生の下では、選挙や政治的コミュニケーションなどを対象とした実証的

計量分析の方法を叩き込まれた。杏林大学では二〇年間お世話になったが、二〇〇四年四月から縁あって母校の教授となつて、学生には理論化を目指した演繹的な仮説構築と実証的な検証の方法を教えるという現在を迎えている。

堀江先生は非常に温厚で、弟子にとっては理想の師であった。学生の不勉強を前に、堀江先生がいらいらされたり、不愉快な顔をされたりすることはあつても決して大きな声を出し、怒りを露わにされた場面を見たことがない。その指導は、懇切丁寧で優しさに溢れていた。私たち大学院生が書いた論文を、先生の研究室で相対しながら、びっしりと赤で加筆・修正をしていた。指定の二〇字×一〇行の二〇〇字詰め原稿用紙に論文を手書きで書く当時において、文章は簡潔に三行以内でまとめ、決して「そして」という接続詞を使つてはならないという、文章を書く上での基本を教えていただいたのも堀江先生である。また自分でも整理できていないことを、「君の言いたいことはこうだろ。」と鋭い視点から論理的に簡潔にアドバイスをいただいたことも忘れられることはできない。堀江先生には、単に論文の完成を手助けしていただいた以外に、就職には業績が必要であるとい

うことから、論文を発表する機会を沢山与えていただいた。私は修士の時代に三本の論文を書いたが、いずれも堀江先生の叱咤激励のおかげである。

堀江先生と同僚として一緒に働く機会は慶應では得られなかったが、堀江先生が慶應を定年退職された後、私の職場であった杏林大学に客員教授として赴任された時は、本当に嬉しかった。当時の杏林大学の客員教授は教授会への出席を除いて学校行政を担当することのない専任教員という位置付けであった。ある日の教授会が終わった後、教授会での私の発言に対して、「君の言うことはもつともだ。」と声を掛けていただいたことを忘れることができない。

堀江先生、本当にありがとうございました。今の私が研究者のはしくれとして、母校の教壇に立ち、「政治」とは何か、それをどのように実証的に分析するのかを学生に教えられるのも、すべて堀江先生のお陰です。ご冥福をお祈りいたします。堀江先生が育てられた多くの弟子の将来を天国で見守っててください。

法学部教授 河野 武 司